青少年育成センターだより

第２３６号　２０２６．１１．１

防府市教育委員会生涯学習課

青少年育成センター

０８３５－２４－３２３２

「私の歩んだ道－見えないから見えたもの－」

このタイトルは、今から９年くらい前に岡山市で開催された中四国中学校長研修会での講演会の演題です。講師は、岡山県立盲学校の元教頭であった竹内昌彦さんです。竹内さんは、昭和２０年(1945 年)生まれ、当時７２才で全く目が見えません。５才の時の病気が原因で右目が見えなくなり、左目の視力もほとんど失われたそうです。そして、小学２年生の時に、網膜剥離という重い病気になり手術を受けましたが、残念なことに失明してしまいました。そして、小学３年生からは、岡山県立岡山盲学校に編入し、以後、中学部・高等部へ進学し、東京教育大学盲学校教員養成課程で教員になるための勉強をし、卒業後は岡山県立盲学校教諭として、さらに教頭として退職までずっとお勤めになり３８年間の教員生活を全うされ退職されました。

今回のセンターだよりではその時の講演の中から、ぜひみなさんにもお伝えしたいことを紹介します。

竹内さんは、小学生の時からずっと視覚障害者としての生活を送られていますが、「自宅での生活で困ることはほとんどない。」けれど「初めての場所や新しい仕事に慣れるまでに時間がかかる。」と言われました。そして、「視覚障害者から、みなさんにお願いしたいこと」として、つぎの２点を言われました。

① 点字ブロックの上に、自転車を置かないでほしい

② 困っている視覚障害者を見かけたら、迷わず声をかけてほしい　　ということです。

① は、当たり前のことですが、実はそうでないことがあって、大変困っているそうです。みなさん想像してみてください。目の見えない人にとっては、点字ブロックは道を歩く時の命綱のようなものですね。白い杖で前方を探りながら、点字ブロックの上を歩いていくわけですから、そのブロックの上に自転車などの障害物があればとても危険なんですね。まずは私たち一人ひとりがこのことをしっかり意識してこれから点字ブロックの上に障害物がないかも意識して見ていきたいものです。ちなみに、点字ブロックは、１９６７年に全国で初めて岡山市に設置され、３月１８日が、「点字ブロックの日」だそうです。

② は、どんな声をかけたらいいかというと、「どうぞ、右手につかまってください」と声をかけ、右ひじをそっと差し出すといいそうです。「右手につかまってください」と声をかけられたら、「この人は目の見えない人の扱いに慣れているな」と安心するそうです。親切心で、杖をつかんで誘導したり、腕を引っ張って連れて行こうとしたりとすると、見えない人にとっては「どこに連れていかれるのだろうか」ととても不安になるそうです。そっと右ひじを差し出すことで、目の見えない人は左手で肘をつかみ、右手の杖で前方を探りながら案内してくれる人の一歩後ろからついていけるという安心感があるようです。

これから、もし、目の不自由な人に出会ったら、「何かできることはありますか」「右手につかまってください」と迷わずに声をかけたいものですね。(ちょっとした自己紹介をして声をかけると、より安心されるかもしれませんね)

裏へ続く

そして、「私の訴えたいこと」として、次の３点を話されました。

① 人はなぜ勉強するのか　② 求める進路が得られなかったときは、どのように生きたらよいのか　③ 健康な身体に感謝して、それを意識した人生を送ってほしい　この中で①について紹介します。

竹内さんは、なぜ勉強するのかという問いの答えを**「立派な人になるため」**、立派な人とは**「周りの人に幸せや喜びをあげられる人（自分を生かせる人）」**と言われました。小・中学生のこどもたちに、「どうして勉強しなくちゃいけんの？」と聞かれたら、この竹内さんの**「周りの人に幸せや喜びをあげられる人になるために」**という思いを是非伝えたいものですね。

竹内さんは、退職された後、様々な講演会でお話しされ、すでに当時で２０００回以上講演されていたそうです。私がすごいと感じたことは、その講演会で得た講師料や本の原稿料で、モンゴルやキルギスに盲学校を設立しているということです。

日本では、盲学校の勉強の中で、あん摩マッサージ指圧師免許・鍼師免許・灸師免許を取得するためのチャンスを与えられ、努力して資格を取ると、卒業後に自立して生活していくことができます。しかし、外国ではそのようなチャンスがなく、自分で働いて生活していくことができず、社会の中で生きていくことが難しい。そこで、モンゴルやキルギスのこどもたちにそのような技術を盲学校で学び、将来収入を得て生きていくための希望をもたせるために、盲学校を設立したということです。

また、現在、「ヒカリカナタ基金」（理事長　竹内昌彦さん）という NPO 法人を立ち上げられて、貧しい国の目の不自由なこどもたちに目の手術費を送る活動をされています

幼少期から大人になるまで、いじめや障害者差別など数々の困難に立ち向かい、ひとつひとつ乗り越えていった波乱の人生とその生きざまを語っていただいた竹内さんのお話は、私にとって、とても貴重な講演会となりました。

文責＝青少年育成センター指導員　大本